りびんぐらいぶず　令和2（2020）年4月第1号

お念仏は称えさせて戴きましょう

◆ご讃題

真実信心の称名は　　弥陀回向の法なれば
不回向となづけてぞ　　自力の称念きらはるる

（『正像末和讃』第三九番、註釈版聖典 p607）

◆はじめに

釈 徹宗先生の真宗十派の記念御法話によれば**「させていただく」**とは、近江商人によって花開かれた浄土真宗のおみのりの文化であると聞かされました。

そうしますと、お念仏は、如来様から回向されたお念仏でしたから「称えさせて戴きましょう」となります。

先の大戦で大阪の町並み（と共に）灰燼に帰したその精神さえ復活して下さるならば、「信心正因　称名報恩」が今に残す課題も解決に到ります。

◆信心正因　称名報恩の課題

課題とは「信前のお念仏は自力の機執に陥るからこれを許さない」と御常教が宗制に改正不可能に規定されたことをさします。

これは、**「信心正因　称名報恩」**のご法義に則り、信心と称名を前後関係で捉えた悲しい現実です。どうしてそういうことになったかというと、これは、お念仏を機の次元で捉えたことに基づく教学の乱れに起因します（Ref 梯　實圓和上の行信教校でのご講義）。

親鸞聖人の法相とは似ても似つかない覚如上人の法相に基づくコンセプトです。

◆親鸞聖人はそんなことはおっしゃってはいません。「行巻の一乗海釈」を拝読すると明らかに知られます（Ref 註釈版聖典 p199）。

「一乗海釈」には、

信心は「機についての対論」の中で「一乗海の機を案ずるに、金剛の信心は、比較するもののない唯一無二、絶対不二の信心である」と仰せになり、お念仏は「教について念仏諸善比校（ひきょう）対論するに」と称して「因行果徳対」「回向不回向対」等詳細にお示し下さってあるからです。

因みに「因行果徳対」とは、念仏は本願成就して阿弥陀仏とおなり遊ばした果上のお徳がおさまる果文の行であるのに対して、諸善は仏になるために積む因分の行であると説明されます（Ref『教行信証』「行巻―一乗海釈」註釈版聖典 p200 脚注）。

このことからもお念仏は、如来様のお悟りの功徳が衆生の上に働き出して下さるお法り

であることが知られます。

◆如来様から賜るお念仏が法であるというのは、正像末和讃に、

「真実信心の称名は、

弥陀回向の法なれば、

不回向となづけてぞ、

自力の称念きらはるる」とおっしゃっています（Ref『正像末和讃』第三九番、註釈版Ｐ６０７））。

真実信心（他力）の称名は、阿弥陀如来から回向して下さっている法（の働き）だから（行者の立場からみて）これを不回向と申します。諸善はそうではなく、行者の行の功徳を浄土往生の為に回向しなければなりません。不回向というお言葉は、法然聖人は第十八願に誓われた行だからお念仏の功徳は回向するには及ばないとおっしゃったのに対して、親鸞聖人は、如来様が回向して下さり、凡夫はこれを賜る側に位置づけ「不回向」とおっしゃったのでした。

今日、ご常教の影響下では、ご本山のお御堂の晨朝ご法座でさえ、お念仏が聞こえなくなったのは、お念仏を機の次元で捉えている誤った姿だったのでした。

◆『教行信証』の「行巻」の「六字釈」には、「帰命」の二文字を縷々釈義された上で「発願廻向」のお心を**「如来既に発願して衆生の行を回施したまふの心（しん=仏心）なり」**と明らかにして下さって居ます（Ref「行巻」「六字釈」註釈版聖典ｐ１７０)。

ですから、布教使は、お念仏は、如来様から**「発願廻向」**された大行を頂戴して行ずるのですよ。（さあ、称えてご覧との如来様の仰せに随い、近江門徒が花開かれた他力の念仏者のお勧めに従って“**お念仏は称えさせて戴きましょう**”と云って称えるのですよ）とご案内できなくてはなりません。

称名は弥陀回向の**「法」**だったからです。

お念仏は如来様が成就して下さった如来様の行です。それを如来様は私にお与え下さってあります。だから、衆生はそれを頂戴して称えれば良かったのでした。

このとき信心獲得前か後かを一切案ずるには及ばないと言うべきかと窺われます。

ご案内は、念仏往生の願（第十八願）に基づいているからであり、踏み込んで云えば、ご案内に首肯するところに既に素朴な信心の姿は備わっているからです。

如来様から賜ったお念仏を行者が称えようとするその刹那には、行者は気付くことがなくても「左様か」と無意識に頭がたれているからです。「左様か」こそは「疑蓋無雑」の信心の相（姿）だったからです。

こうして称えれば私の上で如来様の行「大行」が働いて下さいます。すると聞こえて下さるものがあります。なんと聞こえて下さったかといえば、まぎれもなく「南無阿弥陀佛」と聞こえて下さったのでした。

如来様の仰せのままに称えさせて戴き、聞こえて下さったのだから、聞こえて下さった「南無阿弥陀佛」こそは、如来様のお喚び声だったのです。

後善導とも称せられた元照律師は

「わが弥陀は名をもって物を接したまふ。ここをもって耳に聞き口に誦するに、無辺の聖徳、識心（＝衆生の心）に攬入（らんにゅう）（＝入り満ちること）す」と仰せ下さったのでした(Ref『弥陀経義』註釈版聖典 p180)。

◆なむあみだぶの居り場が知れた

浅原才市さんの詩に「なむあみだぶの居り場が知れた」という詩があります。

これはすごい命題ではないでしょうか。

◆なむあみだぶの、居り場がしれた、
どをして知れた。
わしの心に、みちみちて、
なむあみだぶの声で知られた。
ごをんうれしや、
なむあみだぶつ、なむあみだぶつ。

どうして知れたかというと、まず「わしのこころにみちみちて」とおっしゃった。

これは、親鸞聖人七十八歳のときの和語のお聖教**『唯心鈔文意』**（註釈版聖典 p709）のお言葉**「この如来、微塵世界にみちみちたまへり」**を彷彿とさせます。

次に南無阿弥陀佛の「声」となって聞こえて下さった「その声」で知られたとおっしゃった。称えれば直ちに聞こえて下さる南無阿弥陀佛こそは、如来様のお喚び声だと頂戴していらっしゃった動かぬ証拠であります。才市さんは、既に如来様に聞遇（もんぐう）していらっしゃったのでありました。

だから、後は説明は要りません。

直ちに**「御恩うれしや」**と歌っていらっしゃることでそれと知られます。

面白いことに、才市さんは、なもあみだぶの居り場が知れたと一見矛盾するような次のような詩も残していらっしゃいます。

◆くちに出るのが、　なむあみだぶつ。
ふしぎでならぬ　　なむあみだぶつ、
をりばがしれぬ。　しれぬはずだよ。
機法一体、　　なむあみだぶつ。

これは、法が働いていて下さる自らの外に南無阿弥陀佛の居り場を求めたとしても知ることはできないとおっしゃったのでした。

決して、最初の命題と矛盾するものではないことが知られます。

又、次の様な詩も残していらっしゃいます。

◆あなた、をじひわ、　奇妙な、をじひ。

めにも、みぬのに、　こゑがする。

よんで下さる、　じひのまことよ。

みえないお姿の本質は、喚び覚まそうとして届いて居て下さるお喚び声だとおっしゃっているのでした。このことからもいよいよ「声」が大事だったと知ることができます。

才市さんがお念仏を法の次元で頂戴していらっしゃった姿が次の詩より明らかです。

ご本山表が信前行後の御常教で凝り固まっているとき、如何に地方在野のご住職方が親鸞聖人のご法義を正確にお説き下さって居たかが偲ばれ、胸が熱くなります。

◆悪にかたまる、　わたくしが、

悪をも見ずに、　法を喜ぶ。

親のをかげで　機をとられ、　ご恩うれしや　なむあみだぶつ。

如来様の智慧の光に照らし出されて明らかになったこんな私がお救いに与れましょうか浄土真宗のお同行の最後の疑いです。

このとき発せられたのが「そのままのお救い」というお言葉でした。

「悪をも見ずに法を喜ぶ」「機をとられて御恩を喜ぶ」。これが御恩報謝の原点でした。

◆なんとなく、　なんともないに、

なんとなく、　機と法が、

もつれて、　法をたのしむ。

ごをんうれしや。　なむあみだぶつ。

お念仏は、うたがいもなく法の働きだったことがこれより知られます。

◆閉目開目にありありと見える

◆顧みてロンドリーナ本願寺六十五周年記念行事に向けて坊守が縫い上げた打敷は、閉目開目にありありと目に浮かびました。

観経「日想観」では一般的でピンと来ていなかった不肖に如来様は打敷を通して浄土の荘厳を知らしめ給うた。違いは一般的な入り日の姿と異なり、何ゆえに打敷が所望されたか、どのような経過を経て打敷が編まれたのかの一部始終を知る不肖にとって、閉目開目にありありと浮かんで下さるその姿は胸に迫りました。

お内陣の打敷の荘厳こそは、紛れもなくお浄土の荘厳だったからです。

お浄土の荘厳の本質は、喚び続けていて下さる如来様の招喚の勅命だったのです。

四月二日のお御堂法話で「閉目開目にありありと見える」とお伝えしたところで不肖は絶句してお取次がままならなくなりました。けれども、眼前にいらっしゃるお同行はそうではありませんでした。お御堂一杯にみちみちて下さった如来様の仏心が聞き手の御門徒

さんも包み込みお念仏となって聞こえて下さったからです。

◆お姿こそは声なんです

「住立空中尊（じゅうりゅうくうちゅうそん）」は、韋提希夫人の願前にお姿となって現れられた如来(tathâgata)様であります。観経第七華座観に示されてあります。

この御指南の許に、大経第十七願を頂戴すれば、“ 諸仏如来が悉く咨嗟 ” なさるは、無量寿経一巻のみ教えを指し、“ 称我名 ” と聞こえて下さるは

「その救い主とは私だよ」

と喚び声になって現れ給うた阿弥陀如来そのお方の大悲招喚の勅命であると頂戴することができるかと窺うことができます。

本願成就文に習って、第十七願と第十八願とを一連に頂戴すれば、

衆生は、如来の喚び声に聞遇し、

頭を垂れ（信楽）、

如来に随念（称名）することができます。すると直ちに衆生の上に大行が働いて下さり、南無阿弥陀仏のお喚び声となって聞こえて下さるのだと頂戴することができます。

聞名により如来(tathâgata)の喚び声に喚び覚まされるとき、永遠に消えない灯火が衆生（私）の心に灯るのであります。

浄土真宗は聞名の救いだったのです。合掌。

TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職堅田 玄宥

◆仏教壮年会お聴聞の会六月7日(日)二十時より

◆仏教婦人会例会　六月十六日(火) 十九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥